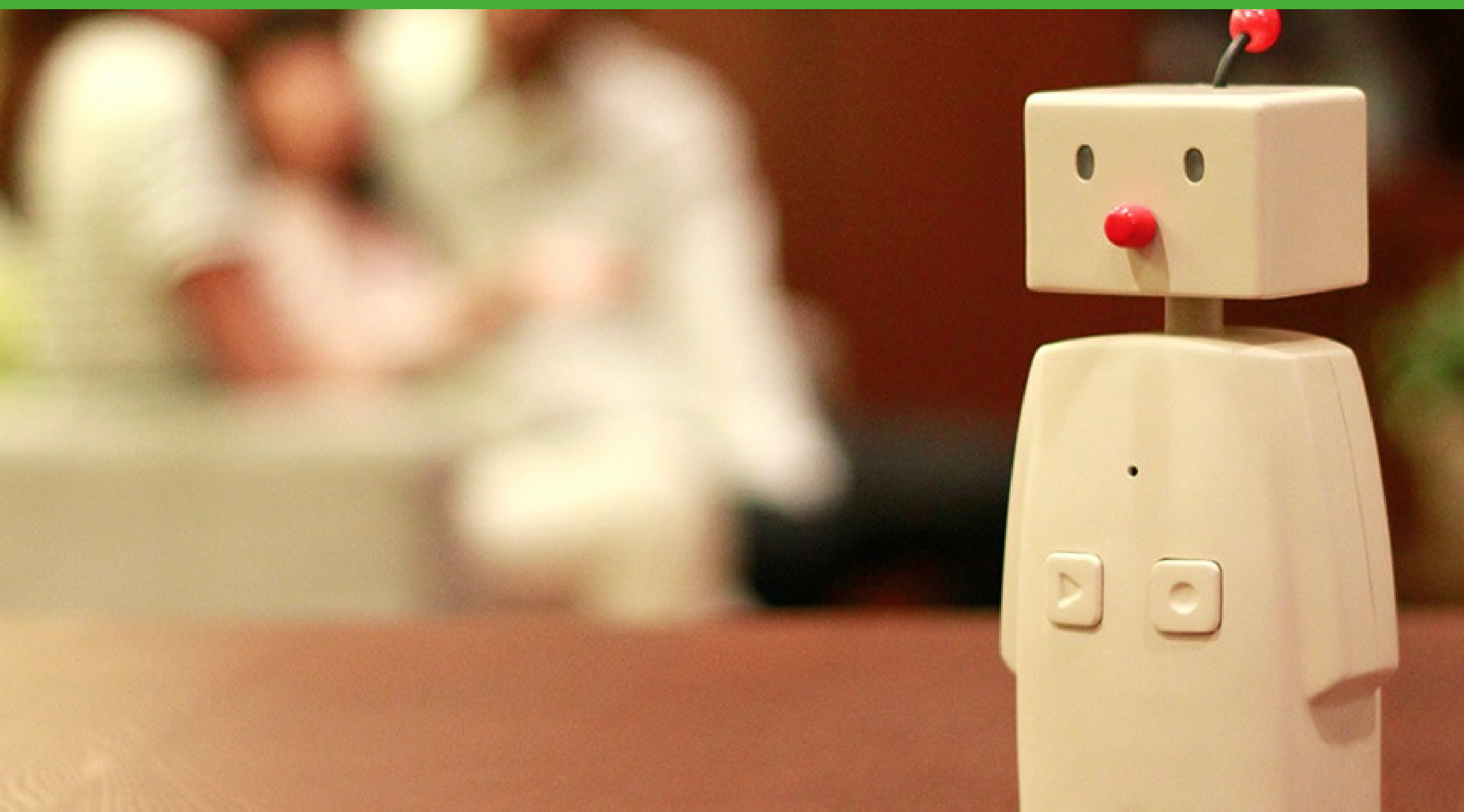


留守中の子どもを見守ってくれる ロボット「BOCCO」

CASE STORIES

March 31 2017

ロボットがコミュニケーションのハブになる近未来



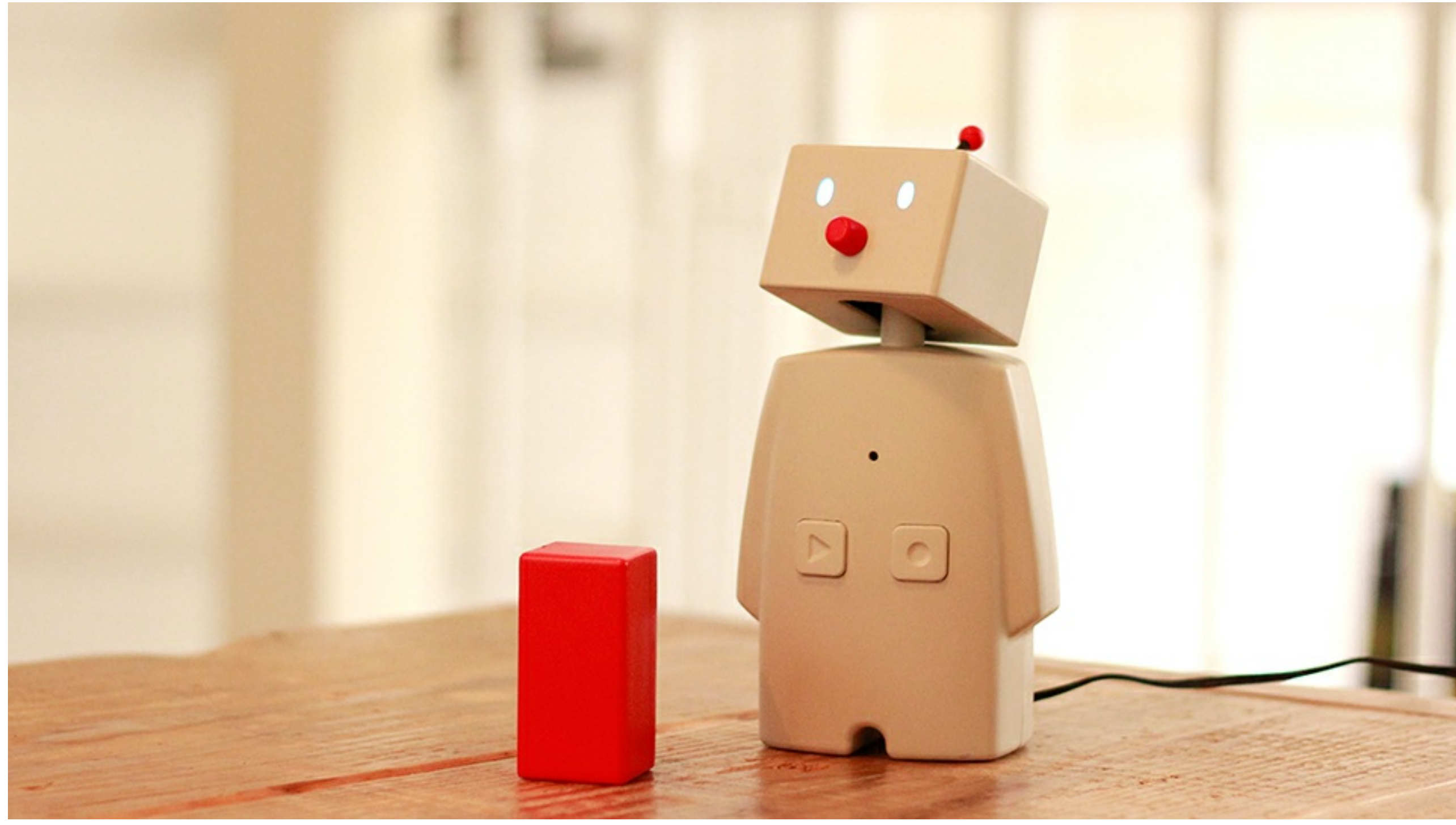
共働き世帯の増加に伴って増え続ける「鍵っ子」

子どもを家で留守番させるとき、「ちゃんと家に帰れただろうか」「ご飯は食べただろうか」「なにか困っていることはないだろうか」といった具合に、親の頭にはさまざまな心配ごとが浮かぶことだろう。

総務省の労働力調査では、日本家庭の半数以上が共働きであることがわかっており、年々共働きの家庭は増加、それに伴いいわゆる「鍵っ子」も増えている。

こうした状況における親子間のコミュニケーションをスムーズにしてくれるのが、ユカイ工学が開発したロボット型のプロダクト「BOCCO」である。

BOCCOの主な機能はテキストと音声の送受信を利用したコミュニケーションと、センサーを利用して家族の家の中での動きを感知すること。センサーの動きはアプリを通じてスマートフォンに通知される。『BOCCO』には部屋のドアを開けたかどうか分かる振動センサーが付属しているため、子どもが帰宅するとアプリに通知がいく仕組みだ。それを確認した親は、テキストや音声で「おかえり」などのメッセージを送ることができるようになる。



音声の送受信は、BOCCOのお腹にある「再生」と「録音」、二つのボタンのみで行うことができ、メッセージを受信すると目が光る仕組みになっている。とてもシンプルでわかりやすい操作性により、子どもから高齢者まで幅広く簡単に利用できるのが最大の特徴だ。

子どもを「監視する」のではなく「雰囲気を感じとる」デバイスに

「BOCCO」のネーミングは、東北の言葉で子どもを表す「ぼっこ」、スペイン語で「口」を意味するbocco（音声コミュニケーションにかけている）、星新一のショートショート『ぼっこちゃん』に登場するロボットの名前（ぼっこちゃん）、それぞれに由来するという。

このような見守りツールにおいてはカメラが搭載されているのが一般的であるなか、BOCCOにはそれが無い。ディスプレイすらも。その理由について開発者の一人、エンジニアである伊藤氏は「カメラが付いているどうしても“監視”になってしまう。『BOCCO』はかっちり見守るというものではなくて、あくまで“雰囲気”を感じ取るゆるいツールでいい」と話す。



▲アプリ上のタイムラインにはこのように通知やメッセージが並ぶ

現在はシンプルな機能のみ搭載しているBOCCOだが、今後は各種センサーの開発に応じてさまざまなサービスと連携していける設計になっている。

湿度センサーや加速度センサーを用いて「部屋が暑いよ。エアコンをつけてほしいな」、「長時間座っているから、そろそろ体を動かしてね」などとアドバイスを送ることで遠くに離れて暮らす高齢者の見守りに活用することができる。また、この加速度センサーを薬箱につけることで、薬の飲み忘れを防ぐリマインダーの役割を担わせることも可能だ。

単にセンサーで「監視」するのではなく、ロボットとの会話を楽しみながら、離れた場所にいる家族がその場の雰囲気を感じ取ることができるBOCCOは、共働き世帯の増加や超高齢社会の問題を解決するキーとなりえるだろう。

ここがACTIVE CARE

センサーによって離れた場所からも家族の家の中の動きを感じ取ることができ、あえて機能や操作性をシンプルにすることで、子どもからお年寄りまでだれでも使える設計になっている。

参考

製品情報

- ・ <http://www.bocco.me/>
- ・ <http://www.ux-xu.com/product/bocco>

開発者インタビュー

- ・ <http://type.jp/et/log/article/bocco>